

“I love him for his sake”

–*All's Well That Ends Well*における Parolles の役割

村上世津子*

(平成18年10月31日受理)

“I love him for his sake”:

A Role of Parolles in *All's Well That Ends Well*

Setsuko MURAKAMI*

Parolles in *All's Well* is not just a Falstaffian figure who gets the audience's laughter. Nor is he a bad angel wrangling Bertram's soul with a good angel, Helena. Under Parolles' influence Bertram goes to the war, disdaining Helena, who saved the king's life and is praised by all the characters in the play except by Parolles and Bertram. Though he earns the king's disfavor by going to the war, he wins honor by “do[ing] the most honorable service”. (3. 5. 4.) Misled by Parolles, Bertram falls in love with Diana, a young gentlewoman in Florence, and gives her his monumental ring for having an affair with her. Though losing the ring is “the greatest obloquy i'th'world” (4. 2. 44) in him, thanks to her trick, this experience ultimately leads him to accept Helena. In his trial Bertram reveals his dishonesty and disloyalty which he acquired through his association with Parolles. When he is forced to face his meanness, however, he asks Helena's forgiveness. Thus, though Bertram is degenerated by Parolles, he realizes Helena's virtue through degeneration. Like the lovers in *A Midsummer Night's Dream* for whom their experience in the woods is a fortunate fall, Bertram's association with Parolles also is a fortunate fall.

key words: Parolles, Bertram, Helena

はじめに

All's Well That Ends Well を読んだときに引っかかるセリフがあった。1幕1場で宮廷勤めに行く Bertram との別れを悲しんでいる Helena が Bertram の家臣である Parolles を見かけたときに口にするセリフである：“One that goes with him. I love him for his sake”¹⁾このセリフは一義的には愛しい人に連なるものは何でも愛しいと思えるから Bertram のお供というだけで Parolles も好きになってしまいそうということの意味して

* 英文学 助教授

いる。しかし問題は Parolles が悪党であることだ。Lafew は Parolles に “art thou good for nothing but taking up, and that thou’rt scarce worth” (2. 3. 194-95) という激しい言葉を投げつけるし伯爵夫人も “A very tainted fellow, and full of wickedness,/ My son corrupts a well-derived nature/ With his inducement.” (3. 2. 79-81) と言う。また貴族たちも Bertram に Parolles と付き合うことの危険性を認識させようと躍起になる: “. . . he’s a most notable coward, an infinite and endless liar, an hourly promise-breaker, the owner of no one good quality worthy your lordship’s entertainment”(3. 6. 7-10) それなのに何故 Bertram と Parolles 以外のこの劇の登場人物がこぞって美德の持ち主だと賞賛する²⁾ Helena が “One that goes with him. I love him for his sake.” と言うのだろうか。悪党が大切な人の側にいるのを見れば悪影響を恐れて離れてほしいと思うのが自然の情ではないのか。

化けの皮が剥がされ、すっかり落ちぶれたときに Parolles は道化に頼んで Lafew との関係を取り持ってもらわなくてはならなくなるが、彼の運命を引き上げてくれるようお願いするときに Lafew との間で次のような会話が交わされる:

Parolles: O my good lord, you were the first that found me!

Lafew: Was I, in sooth? And I was the first that lost thee. (5. 2. 35-36)

Lafew 自身が認めるように Parolles を最初に見放したのは彼だった。しかし Parolles の言葉に反して彼の本性を最初に見破ったのは Lafew ではない。Lafew が Parolles の本性を見破るのは 2 幕 3 場で健康を回復してもらった報酬として王が Helena との約束に則り Bertram に Helena との結婚を強要した後である: “I did think thee, for two ordinaries, to be a pretty wise fellow....I have now found thee.” (2. 3. 190-94) しかし Helena は Lafew よりずっと前から Parolles の本性に気づいている。“One that goes with him. I love him for his sake.” というセリフの後には次のセリフが続く: “And yet I know him a notorious liar,/ Think him a great way fool, solely a coward.” (1. 1. 88-89) なるほど伯爵夫人や貴族たちが Parolles の本性に気づくのは Lafew が彼の本性を見破った後である。しかし Helena は “One that goes with him. I love him for his sake.” と言うときには既に Parolles の本性に気づいている。つまり Helena は Parolles の本性を知らずに “I love him for his sake.” とやったという理屈は通用しない。それどころか “And yet. . . coward” という言葉の後には次のセリフが続く:

Yet these fixed evils sit so fit in him

That they take place when virtue’s steely bones

Looks bleak i’th’cold wind. Withal, full oft we see

Cold wisdom waiting on superfluous folly. (1. 1. 90-93)

悪徳の衣を身にまとっていない謹厳実直の人には世間の寒風が容赦なく吹きつけ身を切ら

れる思いをしなくてはならないのに対して悪徳の衣にぬくぬくと包まれている Parolles は世間の風にさらされることもなく羽振りがよいことを Helena は鋭く洞察している。しかも彼女は “Cold wisdom waiting on superfluous folly”(1. 1. 93)がよくあることまで認識している。それなのに何故 Helena は “a well-derived nature”を持っている、換言するならば “cold wisdom”である Bertram が “superfluous folly”たる Parolles に “wait on”する、つまり Parolles の指示を仰ぎ、彼とともに行動することに危惧の念を抱かないのだろうか。 “One that goes with him. I love him for his sake.”という Helena のセリフは *All's Well* 中の Helena と Parolles の関係が Lawrence や Bradbrook が指摘する³⁻⁴⁾ような Bertram を善に導く力と悪に導く力という単純な psychomachia の図式に当てはまらないことを示唆してはいないだろうか。それならそのセリフはむしろ Calderwood が指摘するように “a change in Helena's values, a movement toward Parolles”⁵⁾を示唆しているのだろうか。本稿では Parolles の役割を中心に *All's Well That Ends Well* を考察したい。

I

Parolles の役割を詳細に検討していく前に彼が *All's Well* の上演史の中で、また批評家たちの間でどのように受け止められてきたかについて軽く触れたい。Charles 1 世がこの劇の題に “Monsieur Parolles”と注をつけた⁶⁾ことは有名だが18世紀の役者と観客の間では Parolles に人気が集中した。⁷⁾ Samuel Johnson は Parolles を Falstaff と比較した⁸⁾が現代でも Parolles を Falstaff 的な人物と見なす解釈は根強く残っており Hapgood は Parolles の最大の特徴は “a conjunction of liveliness with shame”⁹⁾であると考え、Rossiter は “miles gloriosus. . . of the commedia dell'arte”¹⁰⁾であると述べ、Rothman は “the prime source of humor”¹¹⁾と述べている。4幕1場で Shakespeare が他者に聞こえないことを前提とする独白の伝統を破ってまで Parolles が太鼓を取り返しに行かない理由をあれこれ模索するのを隠れて聞いている貴族たちに茶々を入れさせるのが観客の笑いを招くことを目的としていることは批評家たちの指摘を待つまでもない。また4幕3場の Parolles の試練の場面で貴族たちの計略にかかっていることに気づいていない Parolles に彼らの前で彼らを悪しざまに言わせることの目的も同様である。

最近では Parolles と他の登場人物の関係について指摘する批評家も多い。たとえば Edwards は Parolles と Bertram の関係について “The treatment of Parolles shows us a scoundrel changed by shame into a new recognition of himself and a new way of life. Bertram is not so treated. Helena never saves him. He is unredeemable.”¹²⁾と述べ、Wilson は反対に “If Parolles has been the encourager of Bertram's riots, he is also a foil besides whom Bertram begins to appear less base.”¹³⁾と述べている。また Huston は Parolles と Helena の関係について Helena は Parolles から vitality を受け継ぐが彼女の vitality が “is used in an essentially productive manner”¹⁴⁾であるのに対して Parolles の energy は “basically destructive in nature, for his apparent vitality ultimately proves to be misdirected”¹⁵⁾であると述べている。Parolles の役割は Wilson の指摘するように

Bertram の罪を軽減することにあるのだろうか．Edwards の指摘するように Bertram は本当に “unredeemable”なのだろうか．そして Huston の指摘するように Parolles の energy は本当に道を誤らせることにしかつながらないのだろうか．Parolles の行動を追跡してみよう．

この劇の終わり近くで Lafew は伯爵夫人に “your son was misled with a snipped-taffeta fellow there”(4. 5. 1)と言うが Parolles は具体的にどのように Bertram を感化していったのかについてまず検討してみたい．Parolles が Bertram に道を誤らせる第一歩は，意に反して Helena と結婚させられたことに不満を持ち嫌な妻から逃れるために Florentine war に行きたいと思っている Bertram の気持ちを煽り立てて，母からの手紙を読んで考え直す暇も与えずに戦場に駆り立てることである：

Ay, that would be known. To th' wars, my boy, to th' wars!
He wears his honour in a box unseen,
That hugs his kicky-wicky here at home,
Spending his manly marrow in her arms,
Which should sustain the bound and high curvet
Of Mars's fiery steed. (2. 3. 256-260)

Bertram も Parolles も王の行為にそむき立派な娘を見下して勝手な振る舞いをするのが Helena の心を傷つけるだけでなく，王の不興を買うことによって自らの破滅を招くことになることを一顧だにしない．

Parolles は Bertram を戦場に駆り立てるだけではない．彼は“*He wears his honour in a box unseen, ...which should sustain the bound and high curvet / Of Mars's fiery steed*”と言って Bertram を戦場に駆り立てたのに戦地では Bertram をたきつけて女に言い寄らせて情欲の虜にする．2 幕 3 場で王に Helena との結婚を強要されたときに Bertram は碩学の医師たちが匙を投げた王の病を治すほど徳が高くても爵位を持たない貧乏医者娘なんかと結婚できないと言って王の申し出を拒絶するほど名誉にこだわっていた．しかし Florence の未亡人の娘である Diana への恋の虜になったときに Bertram は素性がよくわからないどころか名前さえもよく知らなかった女性との情事のために Rossillion 家に先祖代々伝えられてきた家宝である指輪を手放しさえる：

Bertram: They told me that your name was Fontybell.
Diana: No, my good lord, Diana. (4. 2. 1-2)

“I was well born”(3. 7. 1)という未亡人のセリフはあるが Helena が未亡人とその娘の協力を取り付けるために口で説得したりお礼を言ったりするだけでなく “Take this purse of gold,/ And let me buy your friendly help thus far,/ Which I will overpay and pay again.”(3. 7. 14-16)と言わなければならなかったことはこの未亡人母子がそれだけ

Helena よりも地位が低いことを示唆している .

Diana から逢引の約束を取り付けるときに Bertram は妻が死んだら彼女と結婚する約束をするが、これが口先だけのものであることは Helena の死を耳にすると喜び勇んで帰国し Diana との約束は一顧だにしないことから明白である . 王が Helena の死とともに “the nature of his great offence is dead”(5. 3. 23)だから “a stranger”(5. 3. 26)として Bertram を遇し、改めて Lafew の娘との結婚の提案を持ちかけると Bertram はその提案に飛びつき彼女への愛こそが彼をして美德の鑑である Helena を過小評価させたと言う :

.....At first
I stuck my choice upon her.....
.....
.....Thence it came
That she whom all men praised, and whom myself,
Since I have lost, have loved, was in mine eye
The dust that did offend it. (5. 3. 45-55)

しかし Bertram が本当に Maudlin を思慕していたわけではないことは Lafew から彼女への “a favour”(5. 3. 74)を求められたときに Bertram が Helena の指輪を差し出すことから明らかである . なるほど Bertram はそれが Helena の指輪だとは知らなかった . しかし彼はそれが Diana (と思った)との情事の際に彼の指輪と交換に受け取ったものであることは知っているはずだ . その指輪がどんなに高価なものであれ、その情事が 1 回限りの行きずりのものでありその女性との関係が完全に断たれているにしても、過去の女とのつながりを示すものをもらって喜ぶ女性はいないし、本当に思慕している女性にそのような贈り物をしようとする男性もいない . Bertram が差し出した指輪が Helena の指輪に似ていることをまず Lafew に、次に王、そして伯爵夫人に指摘された Bertram は “In Florence was it from a casement thrown me”(5. 3. 93)と嘘をついて Lafew や王の Helena 殺害についての疑惑の目から逃れようとするが、何とかうまい嘘をついてその場をしのごうとする態度はできもしないとわかっているのに敵に奪われた太鼓を取り戻すと公言し貴族たちに太鼓を取り戻すために勇猛奮闘したと思わせる嘘をでっちあげようとする Parolles の姿を想起させる . Bertram は「奥様がお亡くなりになれば結婚するとお約束なされたから操を捧げたのにその約束を反故にされた」と Diana 母子に訴えられると “this is a fond and desperate creature,/ Whom sometimes I have laughed with”(5. 3. 176-77)とか “a common gamester to the camp”(5. 3. 186)と答える . そして「証拠」の指輪を提示されたときですら “Her insuite cunning, with her modern grace,/ Subdued me to her rate”(5. 3. 214-215)と言って言い抜けしようとする . 他者を貶めてまで言い抜けしようとする Bertram の態度は敵の捕虜になった(と思った)時に何とか生き延びるために戦力その他に関する軍の機密を漏らし、戦友たちを平気で裏切った Parolles の態度と酷似している . Bertram は “villainous saffron”(4. 5. 2)である Parolles の悪影響をまともに受け完全に墮

落させられたように見える。

しかしここで注意しなくてはならないことがある。Parollesの悪影響を受けたBertramが平気で他者を貶めて言い抜けしようとするのはBertramの最下点であるがこの地点では既に彼を墮落させたParollesが彼を最初に見放したLafewと和解をしていることだ：“Sirrah, enquire further after me. I had talk of you last night; though you are a fool and a knave, you shall eat.”(5. 2. 42-44)しかもParollesの最下点であった彼の試練の場面から一転してBertramの試練の場面ではParollesがDianaの証人として召喚される。これらの点を考慮するならばParollesを単にBertramを悪に導く力とみなすことには問題があるように思われる。以下ではParollesの行動を再検討しよう。

II

ParollesがHelenaとの結婚を強要されたことに不満を持ち嫌な妻から逃れるために戦場に行きたいと思っているBertramの気持ちを煽り立てBertramに対する王の不興を招いたことは確かである。しかもその戦争は兵を募るときに王が“for our gentlemen that mean to see/ The Tuscan service, freely have they leave/ To stand on either part”(1. 2. 12-15)と言うような大義の不明瞭な戦争である。それを認めた上でなお武勲を立てることが*All's Well*の中で名誉とされていることは紛れもない事実である。なるほどHelenaは彼女から逃れるために戦場に赴くBertramを憐れみ、また自責の念に苛まれて次のように言う：“...is it I/ That drive thee from the sportive court...to the mark/ Of smoky muskets?...No, come thou home, Rossillion,/ Whence honour but of danger wins a scar/ As oft it loses all.”(3. 2. 94-114)しかしもしBertramが“whence honour but of danger wins a scar/ is oft it loses all”だから“mark of smoky muskets”になるより“sportive court”の方がいいという理由で宮廷に残ったらどうであろうか。これこそまさに太鼓を取り戻すと公言したものの“my heart hath the fear of Mars”(4. 1. 23)だから実行に移せない臆病兵士たるParollesの姿である。Tuscan Serviceの大義が曖昧であるにしても*All's Well*の中で武名を挙げるのが重視されていることは戦いに発つ貴族たちに向けた王のはなむけの言葉から明らかである：“Let higher Italy...see that you come/ Not to woo honour, but to wed it, when/ The bravest questant shrinks.”(2. 1. 12-16)確かに王は“too young”(2. 1. 28), “the next year”(2. 1. 28), “’tis too early”(2. 1. 28)などという理由でBertramを残しておこうとするが、それはあくまでBertramの兵士としての未熟さを考慮した上での発言であり、長期的には彼にも勇者たることが求められていることは明らかである。この劇の始めでBertramは伯爵夫人からも王からも顔立ちだけでなく父親の美德の数々も受け継ぐことが求められているが父の美德の1つは武勲を立てることである：“He did look far/ Into the service of the time, and was/ Discipled of the bravest”(1. 2. 26-28) Helenaを捨てて戦場に行くことが王の不興を買うことは確かだがそれは不治だと思われていた王の病を治した王の「命の恩人」を見下し、王の名誉を傷つけたことによるものであり、戦場に行くことそのものによるのではない。戦場で勇敢な働きをすることがBertramにとっても名誉となることはBertramが顔に“a patch of velvet”(4. 5. 75)をはっ

て帰国したときに Lafew が “A scar nobly got, or a noble scar, is a good livery of honour”(4. 5. 79)とすることから明らかであるし “my revenges were high bent upon him”(5. 3. 10)だった王が Helena の死とともに Bertram の罪も死んだと思い、改めて彼に Lafew の娘との結婚を提案しようとする理由の1つは彼を大いにほめた手紙が届いている、つまり Bertram が最高の武勲を立てたという知らせが届いているからである。

III

次に Bertram が Parolles にそそのかされて Florence で一番身持ちが堅いと言われていた女性を誘惑することについて検討したい。まだ若いから留まれという王の命令に背いて戦場に赴くことについては Parolles だけでなく貴族たちも支持していたし、戦場で武勲を立てたことがこの劇の終わり近くでの王や Lafew の Bertram に対する評価に大いに貢献するのに対して Bertram が Diana を誘惑することを支持する者はいない。Helena が死んだという知らせを聞いて自分の娘との結婚を提案する Lafew も Bertram の身持ちの悪さの評判を耳にすると「縁を切った」と思うし、王も Lafew の判断を支持する。Bertram の身持ちの悪さを批判するのは王や Lafew のようなこの劇の年配者たちだけでなく若い貴族も同様である。彼らは特に Bertram が Diana との情事の約束を取り付けるために代々家に伝わる指輪まで与えたことを吹聴するのは墮地獄の罪に相当するとまで思う：“Is it not meant damnable in us, to be trumpeters of our unlawful intents?” (4. 3. 23-24) このように Bertram の情事は *All's Well* の登場人物にこぞって酷評されるがそれは本当に何等の弁明の余地もない行為なのだろうか。

表面的にはこれほどかけ離れたものはないように見えるが Helena の Bertram への思慕と Bertram が Diana に傾ける情熱の間には共通点がある。Helena の Bertram への愛は身分の違いという障害は存在するものの Bertram の母である伯爵夫人にも支持されたものであるし自分が Bertram にふさわしい存在になるまで、つまり不治とされる王の病を治して王の支持を得るまでは自分の気持ちを胸に秘めておくだけの奥ゆかしさも持ち合わせている。そして何より Helena の Bertram に対する思いは一時の熱に浮かされた気まぐれでなくて命がけの恋である。王に Bertram との結婚を認めてもらうために Helena は不治とされる王の病を治しに Paris に行こうとするが “the great'st/ Of his profession”(1. 3. 216)と言われる父が彼女に残した処方箋を持っているとはいえ彼女自身は “a poor unlearned virgin”(1. 3. 212)にすぎない。碩学の医師たちが医学を傾けつくしてなお不治であり王自身もそれを認めているので治療を申し出て聞き入れてもらえる可能性が極めて低いにもかかわらず彼女はその可能性に挑み、失敗したら “a strumpet's boldness, a divulged shame”(2. 1. 166)というそしりを受ける覚悟で治療に取り組む。

Helena の Bertram への思慕が命がけの恋でありやがては伯爵夫人や王の支持を得た結婚に基づく正当な愛になるのに対して Diana に夢中になるときに Bertram は既に Helena と結婚しているから Bertram と Diana の関係は不倫である。Diana を口説くときに Bertram は彼の愛が不変であると繰り返すが、彼の熱情が一時の浮ついた気持ちにすぎないことは Helena が死んだら彼女と結婚するという約束をして Diana から逢引の約束を取

り付けるものの、妻が死んだという知らせを耳にし、彼を束縛する嫌な妻の存在がなくなったことを知ると彼女との約束を一方的に破棄して喜び勇んで帰国することから明白である。実際 Bertram 自身この劇の終わり近くで Diana 母子が「証拠」の指輪を提示して彼女と Bertram の結婚の約束を訴えたときに彼女のことを “a common gamester to the camp”(5. 3. 186)と呼ぶ。しかし Bertram が Diana を口説いたときに彼は本当に Diana との情事を行きずりの女とする一時の慰みごとと思っていたのだろうか。情事の約束と引き換えに指輪を求められたときに彼は最初 “It is an honour ’longing to our house,/ Bequeathed down from many ancestors,/ Which were the greatest obloquy i’th’world/ In me to lose.”(4. 2. 42-45)と言って断る。彼が指輪を差し出すのは Diana が彼女の操もその指輪と同様 “Mine honour’s such a ring...Which were the greatest obloquy i’th’world/ In me to lose”(4. 2. 45-49)と言った後である。つまり Bertram と Diana は逢引の約束をする前に自分がしようとしている行為が双方にとってどういうことを意味するか互いに確認しあっているのである。戦地の一種興奮した精神状態にあったにしても、またパツと燃えてはすぐに消える一時の熱情に浮かされたものであったにしても Bertram が Diana を口説いたときにはその時の彼なりに真剣な気持ちだったからこそ “Which were the greatest obloquy i’th’world/ In me to lose”であることを自覚している指輪を差し出したのではないか。この劇の終わり近くで Lafew から Maudlin への愛の贈り物を求められたときに高価とは言え失くしても惜しくはない、いやむしろ失くしたほうがすっきりする過去の女とのよすがを示す指輪を差し出すのと対照的である。そしてその時の Bertram なりに真剣な気持ちで Diana に求愛していることは “It nothing steads us/ To chide him from our ears, for he persists/ As if his life lay on’t.”(3. 7. 41-43, 強調筆者)と言う未亡人の言葉が裏付けている。

Helena の Bertram への恋が身分の上の人に対する恋、Bertram の Diana に対する恋が身分の下の人に向かう恋、前者が社会的に認められる愛になるのに対して後者は社会に認められることのない愛、さらに前者が永続的な愛であるのに対して後者は華やかに燃え盛ってすぐに消える一時の情熱に過ぎないという違いはあるものの両者とも真剣な気持ちで求愛している点は共通している。そして 2 人に共通する感情を伯爵夫人も若き日に経験している：

Even so it was with me when I was young.
If ever we are nature’s, these are ours. This thorn
Doth to our rose of youth rightly belong;
Our blood to us, this to our blood is born.
It is the show and seal of nature’s truth,
Where love’s strong passion is impressed in youth.
By our remembrances of days foregone,
Such were our faults, or then we thought them none. (1. 3. 100-107)

いかに意に反して強要されたものとはいえ、Helena と結婚しているのに Diana を口説くことについて Bertram を弁護する余地はない。しかし伯爵夫人が告白するように青春時代に理性のタガで抑えることのできない激しい恋の虜になることは自然なことである。いやむしろ後述するように Bertram がここで Diana への激しい恋に囚われることこそがこの劇の終わりで Helena を受け入れる下地になるとさえ言える。

この劇の始めで Bertram はまだ若いから留まれという王の静止を聞かずに戦地に行った。彼を戦地に駆り立てた大きな原因が嫌いな妻から逃れるためであることは既に述べたが Helena との結婚を強要される前から既に Bertram が王の命令に反して戦争に行きたいと思っていたことを見逃してはならない：

I shall stay here the forehorse to a smock,
Creaking my shoes on the plain masonry,
Till honour be bought up, and no sword worn
But one to dance with! By heaven, I'll steal away. (2. 1. 30-33)

上に引用したセリフは Bertram の目が恋や結婚よりも名誉に向けられていることを示唆している。この劇の始めで Bertram が傲慢さゆえに爵位も持たない貧乏医者の娘との結婚を拒否したことは議論の余地がないがそれ以前の問題として Bertram は恋や結婚について考えるほど成熟していなかったとも言えるのではないか。Bertram が恋に落ちた相手が Helena よりもさらに身分の低い女性であることも重要である。この劇の始めで Bertram は身分の低さゆえに Helena を嫌った。たとえ一時的な熱に浮かされていたにすぎないにせよ Helena よりもはるかに身分の低い Diana に「家も名誉も命も」捧げても惜しくはないと思ったことは Bertram に Helena を愛することのできる素地があることを示唆するものである。

IV

最後に、父から立派な素質を受け継いだ Bertram が “villainous saffron” である Parolles の影響をまともに受けわが身を守るために平気で嘘をつき他者を貶めて言い抜けしようとする点について考察したい。この点について Bertram を弁護することは Diana への求愛以上に難しい。Samuel Johnson の指摘するように “[Bertram] defends himself by falsehood, and is dismissed to happiness”¹⁶⁾ であるように思われる。しかし Bertram の卑劣さが衆人の前で明らかにされる場面に酷似した Parolles の本性が暴かれる場面と比較するとごく僅かではあるがこの場面の終わりで Bertram の成長が認められることに気づく。

この劇の始めで Parolles は嘘つきで臆病者だということが Helena に知られているものの Helena と処女性について会話する場面や Florentine war に赴く貴族たちに王がはなむけの言葉を述べる場面での貴族たちとの会話や不治と思われた王の病を Helena が治したことについての Lafew と Parolles との会話から判断すると Parolles と他者との関係は良

好である。その関係にヒビが入るのは2幕3場で Lafew が Bertram のことを Parolles の “Your lord and master”(2. 3. 178)と呼んだときである。Parolles は Rosillion 伯の従者であることを断固として認めず「あらゆる伯爵に対して友達だ」と強固に主張する。そして Lafew が身分の差を重ねて指摘すると Lafew のことを年寄り扱いしたり、やっつけてやると言ったりして貴族に対する礼を完全に失って Lafew から見放される。Parolles の本性はやがて貴族たちにも知られるところとなるが Parolles は彼らの変化に気づかない。立派な武人に見せかけたいという気持ちに囚われている Parolles は彼らの名誉心をくすぐる貴族たちの巧みな言葉に乗せられ、敵に奪われた太鼓を取り返して見せると公言する。しかし勇猛果敢な働きを印象付けるどころか敵方の外国人傭兵に囚われたと思ったときには味方の兵士たちの前で命と引き換えに戦友を裏切って軍の機密を漏らし、高潔の名の高い人たちを悪しざまに罵り、人格下劣であることを衆人に印象付ける。すっかり正体のばれた Parolles は貴族たちや兵士たちに去られる。試練の場面の終わりでの “Captain I’ll be no more./ But I will eat, and drink, and sleep as soft/ As captain shall.”(4. 4. 278-280)という Parolles の楽観的な予測に反して生きていくためには Lafew との関係修復を道化にお願いしなくてはならなくなる。この劇の始めで最新流行の衣服を身にまっていた Parolles が道化にお願いするときには Lafew に乞食と見間違われるような強烈な腐臭を漂わせる泥まみれの格好をしていることは観客に Parolles の零落を印象付ける。そして Snyder が指摘するように “knave”と呼んで見下していた道化に Lavach という名で呼びかけることも彼の零落振りを印象付けるのに一役買う。¹⁷⁾

Parolles の運命の下降は彼が自己を認識し運命を受容していく過程でもある。Parolles は Lafew から彼は Rosillion 伯の従者であって対等な関係にあるのではないことを指摘されたときには憤然として強気の態度を押し通そうとしたが貴族たちの計略にかかる前から既に彼の態度に変化の兆しが現れている：

Diana: That jack-an-apes with scarfs. Why is he melancholy?

Helena: Perchance he’s hurt i’th’battle.

Parolles: Lose our drum! Well.

Mariana: He’s shrewdly vexed at something. (3. 5. 78-81)

ここでは戦に赴く貴族たちにハッターをかまして彼の勇猛果敢さを印象付けようとしたときの陽気な調子よさは影を潜めている：

...you shall find in the regiment of the Spinii one Captain Spurio, with his cicatrice, an emblem of war, here on his sinister cheek; it was this very sword entrenched it. Say to him I live, and observe his reports for me. (2. 1. 40-43)

見せ掛けのハッターで核のなさを隠しおおせるとしてきた Parolles がハッターでは隠せないものがあることに気づき始める。

計略にかかった Parolles の行動を隠れて見ている貴族たちは Parolles が “I find my tongue is too fool hardy, but my heart hath the fear of Mars before it, and of his creatures, not daring the reports of my tongue.”(4. 1. 22 - 24)と言って自分の言ったことを悔やみ何とかもってもらしい嘘をひねり出そうと苦心している姿を見て “Is it possible he should know what he is, and be that he is?” (4. 1. 35-36)とあきれろがここでの自己認識は試練の場面の終わりで Parolles が彼の運命を受容していく下地になる。そして敵方の外国人部隊の捕虜になったと思うときに言う “Let me live, sir, in a dungeon, i'th' stocks, or anywhere, so I may live”(4. 3. 206-207)という命乞いの言葉はハツタリの中に半面の真実がある。命と引き換えならどんなに恥にまみれた生活でも受け入れる決心が芽生えたからこそ、この場面の終わりで貴族や兵士たちみんなに見放されたときに「あるがままの自己」を受け入れ「恥に安住して生きる」決意を固めることができる。そしてあるがままの自己を受け入れたときに初めて Lafew との関係を修復することができる。Lafew に彼の運命を引き上げてくれるようお願いするときの Parolles の泥にまみれた姿は最新流行の衣服をまもっていたときの姿と対照的であるが変わったのは服装だけではない。かつては Parolles という名が示すように多弁を弄していたが¹⁸⁾ここでは無駄口を利かない：“I beseech your honour to hear me *one single word*.” (5. 2. 29.強調筆者)この変化は虚飾を廃して生きようとする Parolles の気持ちの表明であるように思われる。もっとも Parolles の成長には限界がある。貴族たちの計略にかかり、Bertram の前で化けの皮を剥がされたときと立場が逆転してこの劇の終わり近くで Diana から彼女の証人として彼女と Bertram の関係を証言するように求められたときに彼は二枚舌を使い要点をはぐらかした(too fine in thine evidence)答えしつかない。しかし限界はあるものの Parolles が謙虚さを身に着けたからこそこの劇の終わりで Lafew の求めに応じてハンカチを差し出したときに彼が膝を曲げてお辞儀をするのを見て Lafew は “Let thy curtsies alone, they are scurvy ones.”(5. 3. 312-13)と言う。Lafew のこの言葉は Parolles を対等ではないがそれなりに遇してやろうという気持ちを表明している。

Bertram の成長は Parolles の成長ほど顕著でない。この劇の終わりで死んだと思われていた Helena が登場して “’Tis but the shadow of a wife you see,/ The name and not the thing”(5. 3. 297-98)と言ったときに Bertram は “Both, both. O, pardon!” (5. 3. 298)と言うが Bertram のこの言葉を額面通りの誠実な言葉として受け入れてよいかどうかには疑問が残る。Helena が登場する直前まで Bertram は保身のため嘘をつき平気で他者を貶めるようなことを言っていたからである。それに彼が提示した条件を2つとも満たした今、私の夫となって下さいますねという Helena の問いに対する Bertram の条件付の愛の誓いは不自然だからである。：“If she, my liege, can make me know this clearly,/ I'll love her dearly, ever ever dearly.”(5. 3. 305-306) 2幕 3場で “Do thine own fortunes that obedient right.../ Or I will throw thee from my care for ever/ Into the staggers and the careless lapse/ Of youth and ignorance...” (2. 3. 152-56)と言う王の脅しに屈して “Pardon, my gracious lord; for I submit/ My fancy to your eyes”(2. 3. 159-60)と答えたと

うに劇の終わりでも Diana との望ましくない結婚から彼を救うための唯一の手段として Helena との和解に飛びつき心にもない返事をしたことは十分に考えられるからである。それを認めた上で 2 幕 3 場で王の脅しに屈して “Pardon, my lord” と言ったときと “Both, both. O, pardon” と言うときには大きな違いがある。2 幕 3 場で “Pardon, my lord” と言うのはあくまで王に対してであり Helena には一言も声をかけない。それに対して 5 幕 3 場の “Both, both. O, pardon” という言葉は Helena に向けられた言葉だからである。なるほど条件付の愛は愛の自然な感情にそぐわないし “I’ll love her dearly, ever, ever, dearly” が Helena でなく王に向けられた言葉であることは確かである。しかし Parolles が Bertram に及ぼす影響を見てきた観客は Parolles の成長を実感した後で Bertram が “Both, both. O, pardon” と言うのを聞くと Bertram の言葉が誠実なものであることを受け入れたい気持ちになる。救いと一体になっているから許しを乞うた¹⁹⁻²⁰⁾にしても試練を通して自己の弱さを思い知らされて初めて傲慢ゆえに見下していた相手に正面から向き合い、許しを乞うことができるようになったからである。Parolles を最初に見放して彼を運命の過酷さにさらし、彼が謙虚さを身に付けたときに彼の運命を引き上げる手助けをしたのは Lafew だが Bertram の身持ちの悪さを知ったときに彼と縁を切ると宣言した Lafew がこの劇の終わりの Bertram と Helena のやり取りを聞いてホロリときていることも Bertram の成長を示唆する 1 つの指標になっている: “Mine eyes smell onions, I shall weep anon.”(5. 3. 310)

以上見てきたように Bertram は Parolles との接触を通して不誠実さや裏切りや嘘などあらゆる悪徳を身につけついに Helena 殺害の容疑までかけられ王や Lafew はもとより伯爵夫人からさえも見放される。しかし最下点まで達したときに初めて Helena の価値に気づき許しを乞うことができる。Haley の指摘するように Bertram と Helena の和解、ひいては Bertram が再び社会に受け入れられるようになることは Helena の功績に負うところが大きい。²¹⁾ Helena の bed trick にかかり Diana だと思って彼女と一夜をともにし指輪交換²²⁾をしていなければ Helena との和解はありえなかったからである。Thomas の指摘するように脇筋で Parolles が貴族たちの計略にかかって零落しやがては Lafew と和解するのは主筋の Bertram と Helena の関係を照射している。²³⁾ しかし Parolles は単なる脇筋に登場し観客の笑いを取る喜劇的人物ではない。Lafew の “your son was misled with a snipped-taffeta fellow there”(4. 5. 1-2) という言葉や伯爵夫人の “My son corrupts a well-derived nature/ With his inducement” という言葉が示唆しているように Bertram の墮落が Parolles と密接な関係を持っていることは否定できないからである。なるほど Diana をして彼の指輪と引き換えに Bertram の口説きに応じさせたのは Helena である。しかし Parolles が Bertram に戦地に赴くことをけしかけ、いかがわしい場所へ連れて行ったりありとあらゆる色事の手管を教えて Diana と Bertram の間を取り持たなかったら Bertram が Diana に夢中になることはなかったわけで Helena の bed trick は成立し得なかっただろうからだ。A *Midsummer Night’s Dream* の中で恋人たちは迷妄の森で狂態を演じたが全能の神的な存在である Oberon に助けられて劇の終わりでは劇の始めより成長してそれぞれふさわしい恋人と結ばれる。同様に *All’s Well* の中で Bertram は

Parolles との付き合いを通して墮落させられるが Helena の bed trick という安全網に助けられて完全に墮落して逃げ場がなくなったときに初めて Helena の価値に気づき彼女に許しを乞うことができる。この劇の終わりで Helena が再び登場するときに彼女は Bertram の子供を身ごもっている。Friedman の指摘するように Bertram は代々彼の家系に伝えられてきた家宝の指輪を保持するだけでなく子孫に伝える使命も帯びている。²⁴⁾ Helena のおなかに宿る子供は単に彼女が Bertram に課された課題を果たしたことを意味するだけでなく Bertram が家宝を伝える対象の存在も示唆するから Parolles との付き合いを通して墮落させられ Diana(と考えた)と関係を持ったことは Bertram にとって “fortunate fall”であったと言うことができる。

結び

All's Well 中での Parolles の役割は単に脇筋に登場して観客の笑いを取るだけでもなければ Helena と対極に位置して Bertram を墮落させるだけでもない。彼はまた Bertram の単なる引き立て役でもなければ Bertram の罪を軽く見せるために存在するのでもない。彼は Bertram をして劇中人物がこぞって賞賛する王の命の恩人である Helena を軽蔑して戦場に行かせることにより王の不興を買わせるが、Bertram の戦地での活躍は彼に武名をもたらし、そして Parolles の手引きにより Diana に熱を上げ彼女の操と引き換えに先祖代々伝わる指輪を与えた(と考えた)ことは Bertram にとってこの上もない不名誉ではあるがここで女、しかも Helena よりもはるかに身分の低い女を知る経験はやがて Helena を受け入れる下地になる。Diana 母子に彼との結婚の約束を訴えられたときの Bertram の卑劣な対応はまさに彼が Parolles との付き合いによって身に着けたものであるが衆人環視の元で卑劣さをさらすことによって Bertram はいやおうなしに自己の醜さに向き合わせられる。死んだと思った Helena が登場したときに Bertram が言う “Both, both. O, pardon” というセリフは Helena との和解が救いと一体になっているから口にできた言葉であるにしても自己の醜さに向き合わせられて初めて Bertram の口を突く Helena に許しを求める言葉であることに変わりはない。そして Bertram の試練に先行する Parolles の試練を通しての成長は観客をして “Both, both. O, pardon” という言葉の中に Bertram の成長を認めたい気持ちにさせる。Bertram は Parolles との出会いによって墮落させられるが Helena の bed trick という安全網のお陰で墮落を通して初めて Helena の価値に気づき彼女を受け入れることができるようになる。*All's Well* 中での Parolles との出会いは Bertram にとって *A Midsummer Night's Dream* 中の恋人たちにとっての森の中の狂態のような fortunate fall の働きをすと言えよう。

注

1) William Shakespeare, *All's Well That Ends Well*, ed. Russel Fraser (Cambridge: Cambridge UP, 1985) 1 幕 1 場 87 行。テキストはこれを使用した。以下この本からの引用はすべて本文中に幕, 場, 行を記すにとどめる。

2) ただし Snyder が指摘するように批評家の間で Helena の評価は分かれており, 多くの

批評家が Helena の行動を懐疑的な目で見ている。

Susan Snyder, introduction, *All's Well That Ends Well*, by William Shakespeare (Oxford: Oxford UP, 1993) 25-40.

3) W. W. Lawrence, *Shakespeare's Problem Comedies* (1931; Harmondsworth: Penguin, 1985) 71.

4) M. C. Bradbrook, *Shakespeare and Elizabethan Poetry: A Study of his Earlier Work in Relation to the Poetry of the Time* (1951; Cambridge: Cambridge UP, 1979) 167.

5) J. L. Calderwood, "The Mingled Yarn of All's Well" *Journal of English and Germanic Philology* 62 (1963): 64.

6) Janette Dillon, introduction, *All's Well That Ends Well*, by William Shakespeare (London: Penguin, 2005) lxi.

7) Dillon, lx.

8) Samuel Johnson, *Johnson on Shakespeare*, ed. Arthur Sherbo (New Haven and London: Yale UP, 1968) 7: 399.

9) Robert Hapgood, "The Life of Shame: Parolles and *All's Well That Ends Well*," *Essays in Criticism* 15 (1965): 269.

10) A. P. Rossiter, *Angel with Horns and Other Shakespeare Lectures* (London: Longmans, 1961) 84.

11) J. Rothman, "A Vindication of Parolles," *Shakespeare Quarterly* 23 (1972): 184.

12) Philip Edwards, *Shakespeare and the Confines of Art* (London: Methuen, 1968) 114.

13) Harold S. Wilson, "Dramatic Emphasis in *All's Well That Ends Well*," *The Huntington Library Quarterly* 13 (1949-50): 232.

14) J. D. Huston, "The Function of Parolles," *Shakespeare Quarterly* 21 (1970): 436.

15) Huston, 436.

16) Johnson, 404.

17) Susan Snyder, "Naming Names in *All's Well That Ends Well*," *Shakespeare Quarterly* 43 (1992): 268.

18) Snyder, "Naming Names in *All's Well That Ends Well*": 269.

19) W. David Kay, "Reforming the Prodigal: Dramatic Paradigms, Male Sexuality, and the Power of Shame in *All's Well That Ends Well*," *Revisions of Shakespeare: Essays in Honor of Robert Ornstein* ed. Evelyn Gajowski, (Newark: U of Delaware P, 2004) 122.

20) M. L. Ranald, "The Betrothals of *All's Well That Ends Well*" *Huntington Library Quarterly* 26 (1963): 191.

21) David Haley, "Shakespeare's Courtly Mirror: Reflexivity and Prudence in *All's Well That Ends Well*" (Newark: U of Delaware P, 1993) 20.

22) Ranald, 190-91.

23) Vivian Thomas, *The Moral Universe of Shakespeare's Problem Plays* (London:

Croom Helm, 1987) 161.

24) Michael D. Friedman, "‘Service Is No Heritage’: Bertram and the Ideology of Procreation," *Studies in Philology* 92 (1995): 85.